

平成 30 年度読書週間事業 いわき総合図書館 企画展

いわきの戊辰戦争

その2-磐城平の戦い-

三階櫓
惣高サ
四丈二尺余



ハツ棟櫓見取図
惣高サ
三文四尺余



いわき市立いわき総合図書館

いわき市平字田町 120 ラトブ 4・5 階

TEL 0246-22-5552

<http://library.city.iwaki.fukushima.jp>



はじめに

慶応3（1867）年10月、江戸幕府の将軍、徳川慶喜が大政を奉還、そして、その年の12月には王政復古の号令が出され、新しい政権が発足しました。

しかし、江戸幕府の影響力を残そうとする勢力と、それを阻止しようとする勢力の対立が深まり、慶応4（明治元、1868）年1月、京都の鳥羽・伏見で武力衝突、戊辰戦争が起きてしまいました。

その後、戦いは関東地方にも波及し、慶応4年6月には新政府軍が平潟（北茨城市）に上陸し、それから1か月あまりの間、いわきの地でも戊辰の戦いが行われました。

6月17日には勿来の九面の戦いが起き、6月28日には泉城が落城、6月29日には湯長谷城が落城しました。そして、磐城平城は6月29日、7月1日、7月13日の3回にわたって、新政府軍の攻撃を受け、落城しました。

今回の企画展示「いわきの戊辰戦争 その2」では、いわきでの戦いのうち、第1次、第2次、第3次と、3回にわたって行われた磐城平城をめぐる戦いを取り上げ、紹介します。

いわき総合図書館長 夏井 芳徳

第1次磐城平の戦い 慶応4（明治元、1868）年6月29日

慶応4（明治元、1868）年6月29日、昼までに湯長谷城を攻め落とした新政府軍の佐土原藩と岡山（備前）藩の部隊は、午後1時過ぎ、湯長谷城を出発し、船尾、湯本と進み、その先、堀坂で奥羽越列藩同盟軍を退け、さらに綴、御厩と進み、磐城平の南西の入り口、長橋に達し、そこで奥羽越列藩同盟軍と一戦を交えた。この時の戦いが第1次磐城平の戦いだ。

この時の戦いの様子が岡山藩の『岡山藩記』（『復古外記 稿本 平潟口戦記 第一』）には、次のように書かれている。

平城長橋門ニ相迫り、激戦数頃、賊ハ前面、竝、左方山手之砲台ヨリ、大砲、小銃無数及乱射候得共、勝敗不相決。一日、四回之戦争、殊ニ炎天、疲労致シ候ニ付、諸隊ヲ鼓舞シ、黄昏ヲ相待、両藩申談、漸々繰引、終ニ物分レニ相成、同夜、湯長谷迄引揚、宿陣仕候。

これを現代的な表現に改めると、次のようになる。

磐城平城下の長橋に着き、そこで数時間、戦った。奥羽越列藩同盟軍は正面と左の山の砲台から、大砲や小銃を激しく撃ってきた。戦いの勝ち負けはつかなかった。この日は炎天のもと、矢板坂、湯長谷城、堀坂、長橋と、4度も戦ったため、兵士たちはとても疲れていた。しかし、士気を鼓舞し、戦った。佐土原藩と岡山藩で話し合い、日暮れ時に引き揚げた。その夜は湯長谷城に宿陣した。

次に、この時の戦いで新政府軍を迎え討った磐城平藩の藩士が書き残した記録を取り上げる。磐城平藩銃士隊の隊長、鍋田治左衛門は「銃士隊出兵進退取調書」（『磐城平藩戊辰実戦記 藩士十六人の覚書』）に、次のような記述を残している。

同廿九日、官軍、新田駅より、追々、襲来致候報告有之候に付、即刻、御城内より繰出。御厩村より笑堂辺へ出兵致候処、綴御関門大瓦解、官軍襲来頻り、本道は勿論、間道よりも進撃、散布の間も無之間、無余儀引上げ、薬王寺台より大館権現堂山、堺村辺へ散布、戦争仕候。及晩景、官軍引取候に付、同夜、同所にて相守候。

これを現代的な表現に改めると、次のようになる。

慶応4年6月29日、新政府軍が渡辺町の新田宿を出発し、磐城平に向かっているとの知らせを受け、鍋田治左衛門は部隊を率い、即刻、出撃した。

長橋を渡り、御厩村に入り、笑堂のあたりまで進んだ。すると、その先、綴に築いた関門が破られ、新政府軍が本街道や脇道から大勢、押し寄せて来た。兵を配置する時間がなく、やむなく引き揚げ、薬王寺台から大館権現堂山、さらには境村のあたりに兵を配置し、戦った。

夕方になり、新政府軍が引き揚げた。その夜は、そのまま守り続けた。

新政府軍襲来の知らせを受け、鍋田はすぐに堀坂に向かった。しかし、時、既に遅く、新政府軍は堀坂の奥羽越列藩同盟軍を破り、綴の関門も突破し、迫っていた。鍋田は御厩から引き返し、磐城平城の西に連なる小高い山の上などに兵を配置して戦った。

次に、磐城平藩の神谷外記の記録「神谷外記書上げ」（『磐城平藩戊辰実戦記 藩士十六人の覚書』）を取り上げる。そこには次のような記述がある。

六月廿九日、新田駅辺より官軍攻寄候注進有之候間、御城中より上坂助太夫殿、御同道にて、神谷外記、処々、見廻り旁、大館権現山へ相越、湯本の方、遠望致候処、堀坂山上ヨリ、敵味方の炮煙頻りに相立、追々、敵襲来の様子に付、早々、御城中へ引取、処々、手配等申談候内、早、敵多人数、御厩村より、追々、向新町、万蔵寺山迄押寄。此時、長橋胸壁守衛には仙兵人数、薬王寺台、真先稻荷には各藩の援兵、平一面の敵味方、頻りに打合。同所、御番所後ろの方よりは大炮方、井上十郎兵衛、亀山秀五郎、其外、附属の人数、更々、時を移し、及奮戦候得共、敢て、怪我等無之、早、其日も薄暮に及び、物別れに相成候。

これを現代的な表現に改めると、次のようになる。

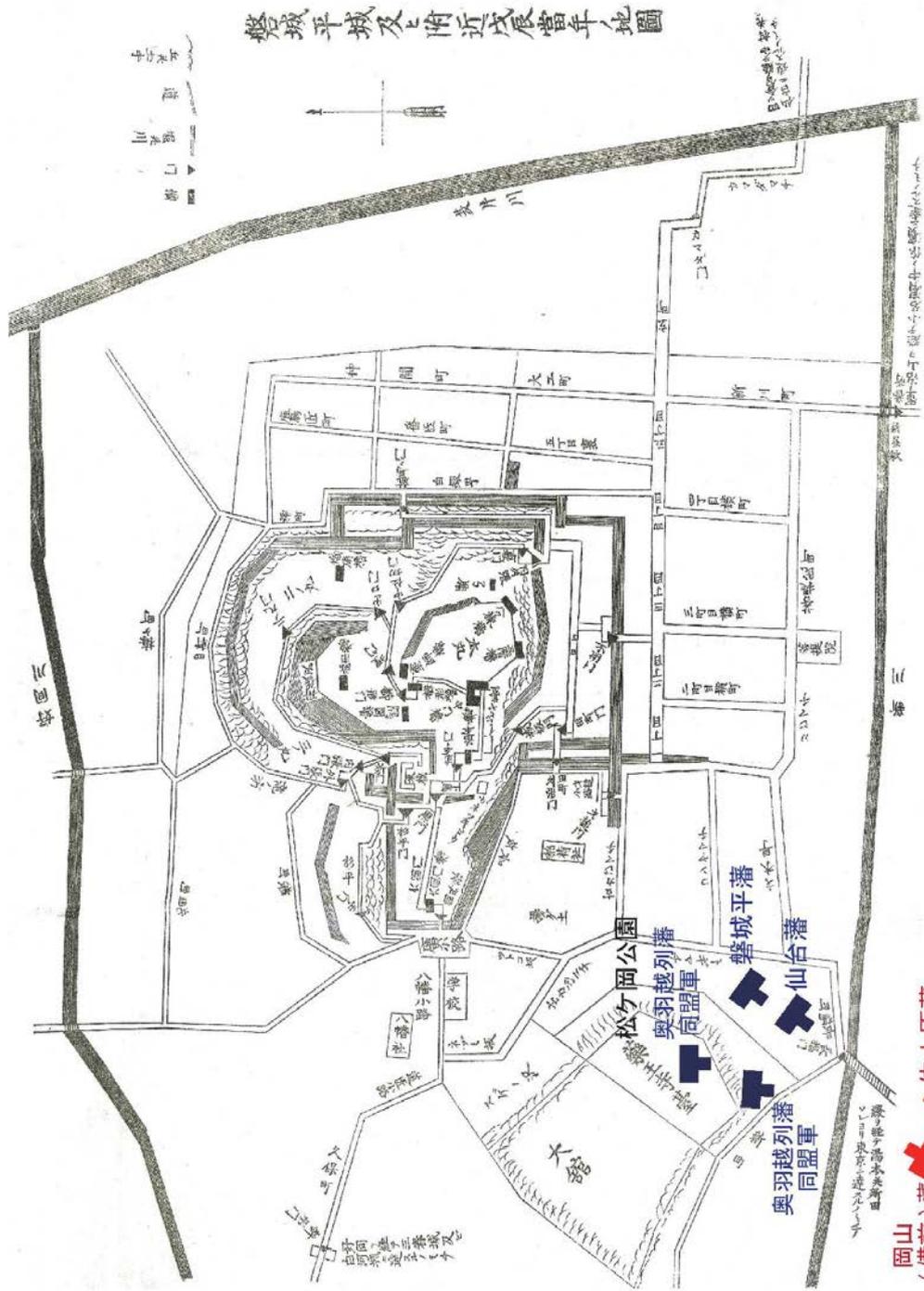
慶応4年6月29日、渡辺町の新田宿から、新政府軍がこちらに向かっているとの知らせがあった。神谷は家老の上坂ともに、城を出、見まわりを行った。途中、大館の権現山から、南の方を見ると、堀坂から砲煙が昇っているのが見えた。早々に城に戻り、守りを固めるよう手配をした。

そうしているうちに、新政府軍が内郷の御厩から向新町の満蔵寺の山まで押し寄せた。この時、満蔵寺とは新川を挟んだ対岸の長橋に設けられた胸壁（弾除けの土塁）には仙台藩が、そして、薬王寺台や真先稻荷には各藩の援軍が配置に着き、激しい戦いが始まった。また、長橋番所の後方からは、磐城平藩大砲隊の井上十郎兵衛や亀山秀五郎などが激しく大砲を撃った。

夕刻、戦いは引き分けに終わった。負傷者などは出なかった。

『岡山藩記』、そして、磐城平藩の鍋田や神谷の記述からは、この日の激戦の様子が伝わってくる。

第1次 警城平城の戦い (慶応4 (明治元、1868) 年6月29日)



岡山 (備前)藩 佐土原藩
 湯長谷城から堀坂經由

第2次磐城平の戦い 慶応4（明治元、1868）年7月1日

慶応4年7月1日、第2次磐城平の戦いが起きた。

小名浜から磐城平に攻め寄せた新政府軍の薩摩藩と大村藩の部隊は、谷川瀬で二手に分かれた。一手は真っ直ぐ、北に向かい、新川町に攻め込んだ。そして、別の一手は西に折れ、現在の新川のあたりに兵を配し、磐城平城を攻撃した。

しかし、この日、新政府軍は奥羽越列藩同盟軍の反撃を受け、敗退した。

この時の様子が薩摩藩の私領二番隊の記録「私領二番隊戦状」（『薩藩出軍戦状』）には、次のように書かれている。

ついたら 小名浜より、四字、繰出、七字過、岩城平城下口にて、戦争相始。一番隊、大村藩
みちのまま 道の儘、進撃。我隊は左之山を越へ、田之中より横合に進撃。城下台場二丁位之所より、
うちだす 砲戦。賊徒は城下口砲台、又は、山上より、大小砲打出。十二字迄、致砲戦候処、味方大小砲共
だんやくとぼしく もっとも 弾薬乏敷、尤、湯長谷口之味方、進撃不致候付、賊徒、後山手に相廻候。半との勢ひにて、二
ぐらい 小隊位も候哉、湯長谷口之橋を打破り、横手に廻り、尤、堅城にて、中々、急に難落候付、繰引
にて、小名浜迄引揚申候。

これを現代的な表現に改めると、次のようになる。

慶応4年7月1日、午前4時、薩摩藩の私領二番隊は小名浜を出発した。そして、午前7時過ぎ、磐城平城下の入口で戦いを始めた。

薩摩藩の私領一番隊と大村藩の一小隊は真っ直ぐ、道なりに進撃したが、私領二番隊は左手の山を越え、田の中を西に進み、城下に築かれた奥羽越列藩同盟軍の砲台から二百メートルほどのところから、砲撃を行った。奥羽越列藩同盟軍は城下の入口や山の上の砲台から、大砲や小銃で攻撃をしてきた。

昼の12時まで、砲戦が続けたが、大砲、小銃、ともに弾薬が乏しくなった。また、湯長谷口からの味方の進軍がなかったため、奥羽越列藩同盟軍の2小隊ほどの人数の兵が長橋を渡り、背後の山にまわり込み、物凄い勢いで攻めて来た。

磐城平城は守りが固く、簡単には攻め落とせない。兵を引き揚げ、小名浜に戻った。

次に、この日、新政府軍と戦った磐城平藩の藩士、神谷外記が書き残した記録「神谷外記書上げ」（『磐城平藩戊辰実戦記 藩士十六人の覚書』）を取り上げる。そこには次のような記述がある。

ついたら ふつぎょう ぐうじやま さく ほうせいおびだしくちたて やがわせむら かね
 七月朔日、払暁より、敵、軍事山の方より探りの炮声夥敷打立、谷川瀬村の方へ押寄せ、兼て、
そのまえ しょしよ きょうへき そのほか かんもん もうけおきそうろうあいだ ならび それぞれ
 其前、処々、緊要の地には胸壁、其外、関門を設置候間、御屋敷の兵、並に各藩の援兵、夫々、
いたしそろう ふるかわ しんかわ たて とり もつとも たいほうにちよう そのうちいっちよう
 持場にて尽力、防戦致候。敵兵には古川、新川土手を楯に取、尤、大砲式挺、其内壱挺は山岸
いっちよう に い だ ばしむかい すえおき め がけ しきり うちだしそらえども とどかず
 より打立、壱挺は新井田橋向に据置、御城中を目掛、頻に打出候得共、御城中へは一発も不届、
たまちあたり はれ ついたしそろう だいしやうほうたえまなくうちたて はや そのひ ゆうなな どき あいなりそろうや べいはん
 皆、田町辺にて破裂致候。大小砲無絶間打立、早、其日も夕七ツ時頃にも相成候哉、米藩、
ながはしむかい やがわせやま うらざりいたしそろう かね つい
 長橋向より谷川瀬山の麓通りより、裏切致候に付、敵たまり兼、終に敗走と相成候。

これを現代的な表現に改めると、次のようになる。

慶応4年7月1日、夜明け時分から、新政府軍が探りの砲撃を行いながら、軍事（空知）山のあたりを進み、谷川瀬村に押し寄せた。磐城平藩の部隊や各藩の援軍は、弾除けの土塁や関門を築き、それぞれが持ち場で力を尽くし、防戦した。

新政府軍は磐城平城下の南を流れる古川と新川の土手を楯に取り、大砲一門を谷川瀬の山際に、もう一門を新井田橋（新田橋）の川向こうに据え、城をめがけて攻撃した。しかし、弾は城の本丸には届かず、本丸の南、田町のあたりに着弾し、爆発した。

激戦の最中、午後4時過ぎだっただろうか、米沢藩の部隊が長橋を渡り、谷川瀬山の麓から、敵の背後に廻り込み、攻撃を加えると、新政府軍はたまりかね、敗走した。

また、磐城平藩の藩士、桑原重左衛門が書き残した「桑原重左衛門書上げ」（『磐城平藩戊辰実戦記 藩士十六人の覚書』）には、次のような記述がある。

ついたら あげつち くりだ おりそろうところ かまたむら まく うちむら しけんちやうあたり
 七月朔日、未明より、揚土へ繰出し居候処、敵軍、鎌田村より幕の内村へ廻り、四軒丁辺へ
そうろうあいだ そとばり ごもん そうろうよう たっ これありそろうあいだ すぐさま めしつれ
 向ひ候間、急速、外張御門相固め候様、軍事局より達し有之候間、直様、人数召連、同所へ
いたしおりそらえども これなくそろうゆえ むろこうへい しけんちやうら
 出張致居候得共、敵、押来り候模様も無之候故、神谷外記殿、室衡平、同道にて、四軒丁裏通り、
うめがちやうあたりじゆんら つかまつりそろう そのせつ ながはし にいかわまち だいしやうほう しきり
 梅ヶ町辺巡邏いたし、裏御門より登城仕候。其節、長橋辺より新川丁辺、大小砲の音、頻に
またぞうらう あげつち そうろうせつ わたくしきよたくまえ たいほうあいすえ しき まかりありそろう
 聞候間、又候、揚土へ出張候節は、私居宅前へ大砲相居へ、杉本謙助外四人、頻りに打懸け罷在候。
そのせつ ながはししもて しんかわ にいかわまち ながはし
 其節は長橋下手より新川通り新川丁迄、平城下一面の戦争と相成り、米藩、仙藩、純義隊は長橋
おじま かか よこあい さ い かが ぞんじ じゆうごちやうめ
 辺より小島へ懸り、横合より人数繰出し候間、他藩に先きを懸けさせ候ては如何と存、十五丁目
うら がっぺい しんかわばた つかまつりそろう このせつ あしがる ておい
 裏より、人数繰出し、米藩と合併にて、新川端へ進み、戦争仕候。此節、足軽、要十郎、手負
もうしつけ このひ
 候に付、手当等申付、隊中の者、相添へ御城内へ相送り申候。此日、諸手、大勝利にて、敵兵、
くも ぐうじやま あらかむら おいうつ も ゆもとぐち
 蜘蛛の子を散す如く、軍事山をさして退き、荒川村迄追打。私隊は、若し、敵兵、湯本口より、
きよ おせいそろう い かが ぞんじ しん やしき あげつちしゆえいつかまつりそろう
 虚を襲候ては如何と存、新屋敷より引揚、揚土守衛仕候。

これを現代的な表現に改めると、次のようになる。

慶応4年7月1日、未明から、揚土あげつちの守りに当たっていると、「新政府軍が夏井川の東岸を鎌田村から幕内村に向かい、橋を渡り、四軒町に攻め込む怖れがあるので、急ぎ、外張門の守りにまわれ」と軍事局から命令があり、桑原重左衛門は部隊を率い、直ちに外張門に向かった。

外張門に着いたが、新政府軍が攻め寄せて来る気配はなかった。そこで、桑原は神谷外記や室衡平とともに四軒町の裏を通り、梅香町のあたりを巡視し、裏（搦手）門から磐城平城内に入った。

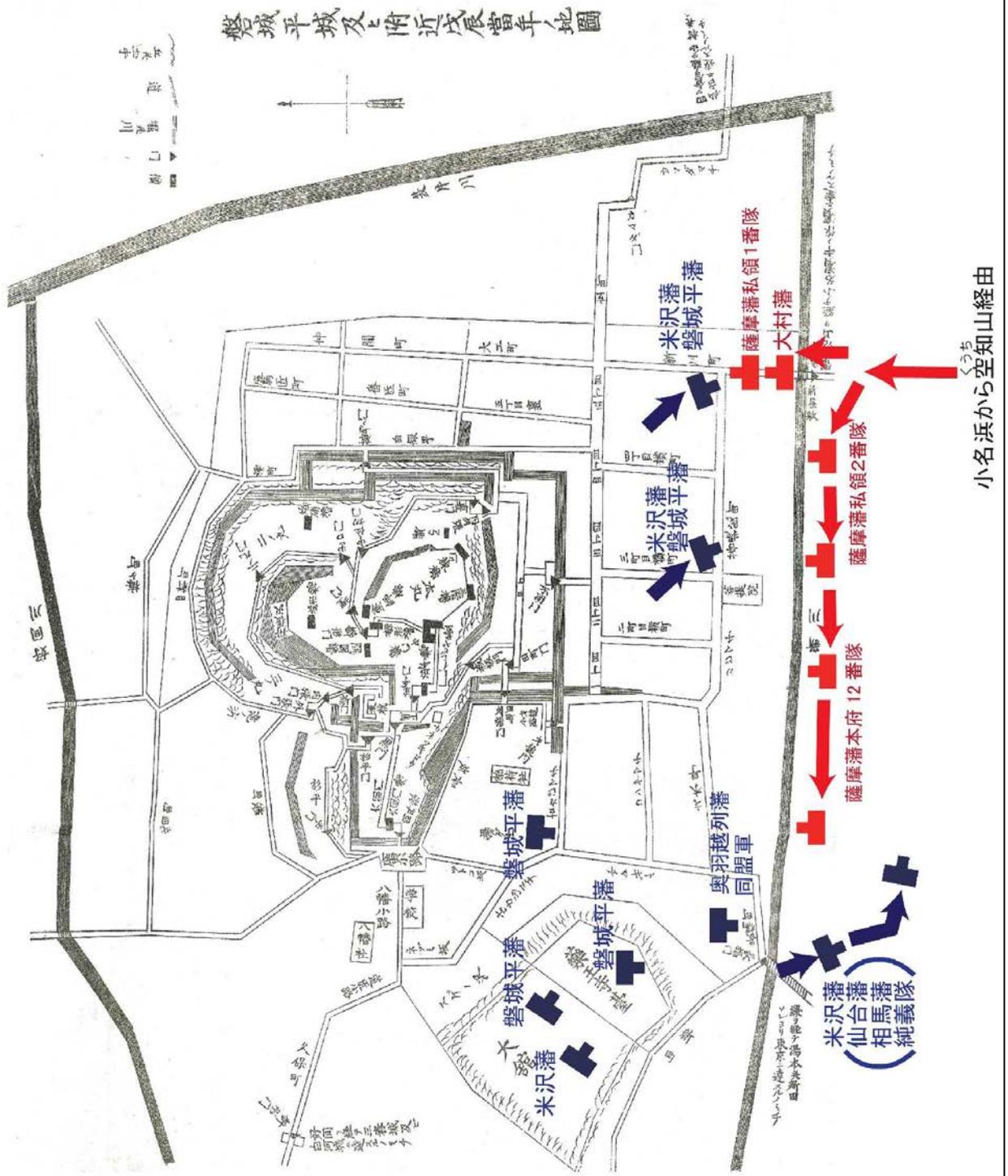
その時、長橋から新川町のあたりで、大砲や小銃を撃つ音がした。揚土あげつちに戻ると、桑原の自宅前の砲台で杉本謙助他4人が盛んに大砲を撃っていた。この時は長橋の下手から新川に沿いに新川町まで、城下一面で戦いが行われていた。

米沢藩や仙台藩、そして、純義隊が長橋を渡り、対岸の小島に進み、敵を横合いから攻撃した。「応援に来ている藩に先を越されては、地元、磐城平藩の面目が立たない」と考え、桑原は十五町目の裏通りから繰り出し、米沢藩とともに新川まで進み、戦った。この時、足軽の要十郎が負傷したので、手当を申し付け、隊員を付き添わせ、城内に引き揚げさせた。

この日は全ての箇所で大勝利となり、新政府軍は蜘蛛くもの子を散らすかのように、空知山の方に引き揚げた。それを荒川村まで追撃した。新政府軍が湯本の方からも攻めて来る怖れがあるので、桑原の部隊は新川町の新屋敷から引き揚げ、揚土あげつちの守りについた。

「此日このひ、諸手、大勝利にて、敵兵、蜘蛛くもの子を散らす如く、軍事山ぐうじやまをさして退き、荒川村迄追打あらかわむら おいうつ」（「桑原重左衛門書上げ」という桑原の文章からは、勝利に湧く磐城平藩の藩士たちの顔が目に浮かぶ。

第2次 磐城平城の戦い (慶応4 (明治元、1868) 年7月1日)



第3次磐城平の戦い 慶応4（明治元、1868）年7月13日

慶応4（明治元、1868）年7月13日、磐城平城下では激しい市街戦が行われた。特に激しい戦いが行われたのは田町、才榎門、そして、六間門の3か所になる。

田町の戦い

田町の戦いでは、現在の JR いわき駅やラトブ、さらには銀座通りや並木通りのあたりが戦いの場になった。

ここでの戦いの様子は薩摩藩の私領二番隊の記録「私領二番隊戦状」（『薩藩出軍戦状』）に、次のように書かれている。

十一番隊、私領一番隊、同二番半隊は不明門を破り、搦手の内堀に攻入、散々、砲戦、剣戦いたし候得共、奥州第一之堅城とやらにて、内堀は深く、殊に城郭は高くして、急に難乗入。暮六字迄、致攻撃候処、参謀より、兵を引揚候様相達候得共、更に可引之機会無之、いつれ、此上は参謀之命を背て、各藩、談合之上、夜攻之決策し、致烈戦候処、同夜十二字、落城に相成申候。

これを現代的な表現に改めると、次のようになる。

薩摩藩の本府十一番隊と私領一番隊、私領二番の半隊は不明門（ラトブの南西角のあたりにあった門）を破り、磐城平城の搦手の内堀まで攻め込み、激しい砲戦や接近戦を行った。しかし、磐城平城は「奥州一の堅城」といわれるだけあって、内堀が深く、また、本丸までの高さもあり、すぐに攻め落とすことができなかった。

日没時分になり、参謀から「兵を引け」との命令があったが、「ここで兵を引くわけにはいかない。攻撃を続けるべきだ」ということになり、夜攻めを行うことを決め、激しい攻撃を続けた。

夜の12時、磐城平城が落城した。

才榎門の戦い

才榎門の戦いについては、薩摩藩の本府小銃九番隊の記録「本府小銃九番隊戦状」（『薩藩出軍戦状』）に次のような記述がある。

城下へ進撃候処、町口門と申一ノ城門、難攻入候付、則、隊長、当先として、城屏を越へ、門をひらき、一同、推入。二ノ城門との間、銃丸、雨の如く、及苦戦。此時、隊長、手負、賊兵も余多、討取。三ノ城門、打破、攻入候処、素より、城の上段までは遙に地形高く、矢倉より大小砲、繁く打卸し、中々、難防。土手之杉林え楯を取、及憤撃候得共、城中、不迫の体、益砲発烈しく、落城不容易形勢、不得止、打合居候処、追々、暮方に相成、参謀より兵を引あげ候様指揮有之。去れ共、此機会を失候ては、迫も、落城無覚束、終日之軍営無詮、是非共、可攻破之評議にて、兵を引揚不申候、

各藩の儀も同様に、^{こうげきのところ}攻撃之処、夜に入、城中、^{よつじぶん}四時分、^{じしやういたし}致自焼、敗走之やうすに付、一同、^{うちいりこれなく}打入無之、
^{めいめい}銘々、^{おり}持場相固め居。翌未明、同勢、本丸へ繰入候処、^{らくきよいた}落去致し、空城に付、兵を引揚、城下町へ
^{つかまつりもうしそろう}宿陣仕申候。

これを現代的な表現に改めると、次のようになる。

磐城平城下に入り、薩摩藩の本府小銃九番隊は才榎門まで進んだ。才榎門は堅固で、攻め入るのが難しかった。そこで、隊長が才榎門の脇の塀を乗り越え、門のなかに入り、扉を開け、部隊を門内に引き入れた。才榎門と、その先の田町の外張門の間では激しい戦いになった。銃弾が雨のように飛び交い、苦戦を強いられた。隊長が負傷した。敵兵を多数、討ち取った。

その後、田町の外張門を突破し、田町の内張門も破った。しかし、城の本丸は遥か高いところにあり、また、櫓からの大砲や小銃による攻撃が激しく、防ぐのが大変だった。濠の土手の杉林を楯に取り、身を隠し、応戦したが、とにかく、苦戦した。敵の攻撃が激しく、手の打ちようがなく、その場にとどまり、撃ち合いを続けた。

夕方になり、参謀から、「兵を引け」との命令があった。しかし、「この機会をのがしては城を落とせない」、「これまでの戦いが無駄になってしまう」との意見が出され、参謀の命令に背いて、攻撃を続けることになった。

夜の10時頃、奥羽越列藩同盟軍は自ら城に火をつけ、敗走した。しかし、すぐには城に入れず、新政府軍の部隊は持ち場を固めた。

翌日の未明、本丸に入った。城には誰もいなかった。その後、数日の間、城下に宿営した。

六間門の戦い

六間門の戦いについては、磐城平藩の藩士、神谷外記が書き残した記録「神谷外記書上げ」(『磐城平藩戊辰実戦記 藩士十六人の覚書』)に、次のように書かれている。

^{ろっけんごもんがい ひろこうじ}六間御門外、^{ひろこうじ}広小路には、^{かのそうませい}敵兵多勢押詰め、同所には彼相馬勢持場にて、^{い か}如何にも奮戦いたし、
^{ことごと つかれ}兵悉く^{こいそろうあいだ}勞候に付、^{あいらし}あら手を乞候間、^{あいらし}外記、^{あいらし}人数引連、同所へ相越、^{あいらし}防戦いたし候内に、^{あいらし}敵方より、
^{ほうがん こうらいごもんびら}大小の^{はげしくあた}砲丸、^{ついで}高麗御門扉に^あ烈敷中り、^あ終に^あ門打折、^あ扉明き候^あ様相成候に付、^{つちだわら}土俵、^{つちだわら}土俵と口々に
^{よば}呼わり^{そうらえども}候得共、^{そのば}其場の^ま至急、^{あいらし}土俵の^ま手当も^{あいらし}間に^{とりあえず}合不申、^{おんくら}不取敢、^{もみだわらじゆう}御蔵より^{もみだわらじゆう}靱俵拾五、^{もみだわらじゆう}六俵持来り、
^{もんび}右にて、^{しき}門扉へ^{はや}押当て、^{はや}頻りに^{あいらし}打合候処、^{あいらし}早、^{あいらし}薄暮にも^{あいらし}及び、^{かけつけ}上坂助太夫^{いたされ}殿^{いたされ}駆附、^{いたされ}同人^{いたされ}指揮^{いたされ}被致、
^{たまのごもん}玉之^{よこあい}御門より^{いらせられそうろうところ}横合を^{かね}被入候処、^{さむらいやしき}敵^{さむらいやしき}たまり兼、^{ひきのきそうろう}あたりの^{ひきのきそうろう}侍屋^{ひきのきそうろう}敷^{ひきのきそうろう}放火^{ひきのきそうろう}致し、^{ひきのきそうろう}引退候。夫にて、^{まず}先、
^{ろっけんごもんぐち}六間御門口の^{いくさ}戦終る。

これを現代的な表現に改めると、次のようになる。

磐城平城の西、六間門の外、広小路には新政府軍の部隊が多数、押し寄せた。六間門の守りには相馬藩がついていたが、激戦のため、疲労し、援軍の要請があった。神谷は部隊を率い、六間門に向かい、戦った。新政府軍が放つ大砲や小銃の弾が六間門の外張門である高麗門の扉に激しく当たり、ついにはかんぬきが

折れ、扉が開いてしまった。土俵を積み上げ、弾除けにしようと、「土俵だ、土俵、土俵を持って来い」と叫ぶ声が聞こえたが、土俵を用意することはできず、代わりに、城内の米蔵から米俵 15、6 俵を運び、それを門の扉のところに積み上げ、応戦した。

そうこうしているうちに、早くも夕刻になった。磐城平藩の家老、上坂助太夫が駆けつけ、自ら指揮を執り、六間門の北にある玉之御門から繰り出し、広小路の新政府軍に攻めかかった。これには新政府軍も耐えきれず、あたりの侍屋敷に火を放ち、兵を引いた。これで六間門の戦いが終わった。

磐城平城の落城

磐城平城落城の際の状況だが、これについては磐城平藩士の中村茂平と神谷外記の 2 人が詳細な記録を残している。2 人の記録から、磐城平城落城の際、次のようなやり取りがあったことがわかる。

六間門に攻め寄せた新政府軍が引き揚げ、六間門での戦いが終わった。その後、戦いに加わっていた磐城平藩の家老、上坂助太夫は、すぐに城の本丸に戻った。そして、そのタイミングで、磐城平藩の主だった者たちが集まり、軍議が開かれた。

軍議では「弾薬が残りわずかで、明日も新政府軍と戦うのは無理だ」との報告がなされ、出席した者たちからも「明日の戦闘継続は不可能。今夜のうちに城を退去するのもしやむを得ない」との意見が出され、大勢を占めた。

そこへ、六間門の戦いから、一足遅れで引き揚げて来た相馬藩の相馬将監胤真しょうげんたねまさが本丸に姿を見せ、上坂に面会を求めた。

上坂は軍議の場を離れ、将監と対面した。城を退去するのであれば、当然、相馬藩の総大将である将監にも状況を説明し、了承を得なければならない。

上坂が「四倉に宿営している米沢藩の部隊に援軍を要請したが、未だ、来ない」と述べた。それに対し、将監は「今、城内にいるのは磐城平藩の藩士と相馬藩の二百人ほどの兵士のみ。そのうえ、磐城平藩の弾薬は残り二千発ほどで、大砲の砲弾も残りわずか。米沢藩の援軍がなければ、明日の戦いは無理です。この際、城から退去すべきです」と口にした。これは上坂をはじめ、磐城平藩の主だった者たちの意見と同じだった。

将監の意見を聞き終えると、上坂は将監のもとを離れ、再び、磐城平藩の主だった者たちによる軍議の場に戻り、将監の意見を伝え、城からの退去を決定したいと述べ、それに皆が同意した。

ところが、その直後、上坂は「皆は城を出て、信正様を守ってもらいたい。しかし、私一人は城に残り、城を枕に討ち死にをする」と自らの覚悟を口にした。しかし、これには磐城平藩の主だった者たちが反対した。

上坂は、再び、将監のもとに向かった。一人、城に残るという自らの覚悟を伝えるためだった。

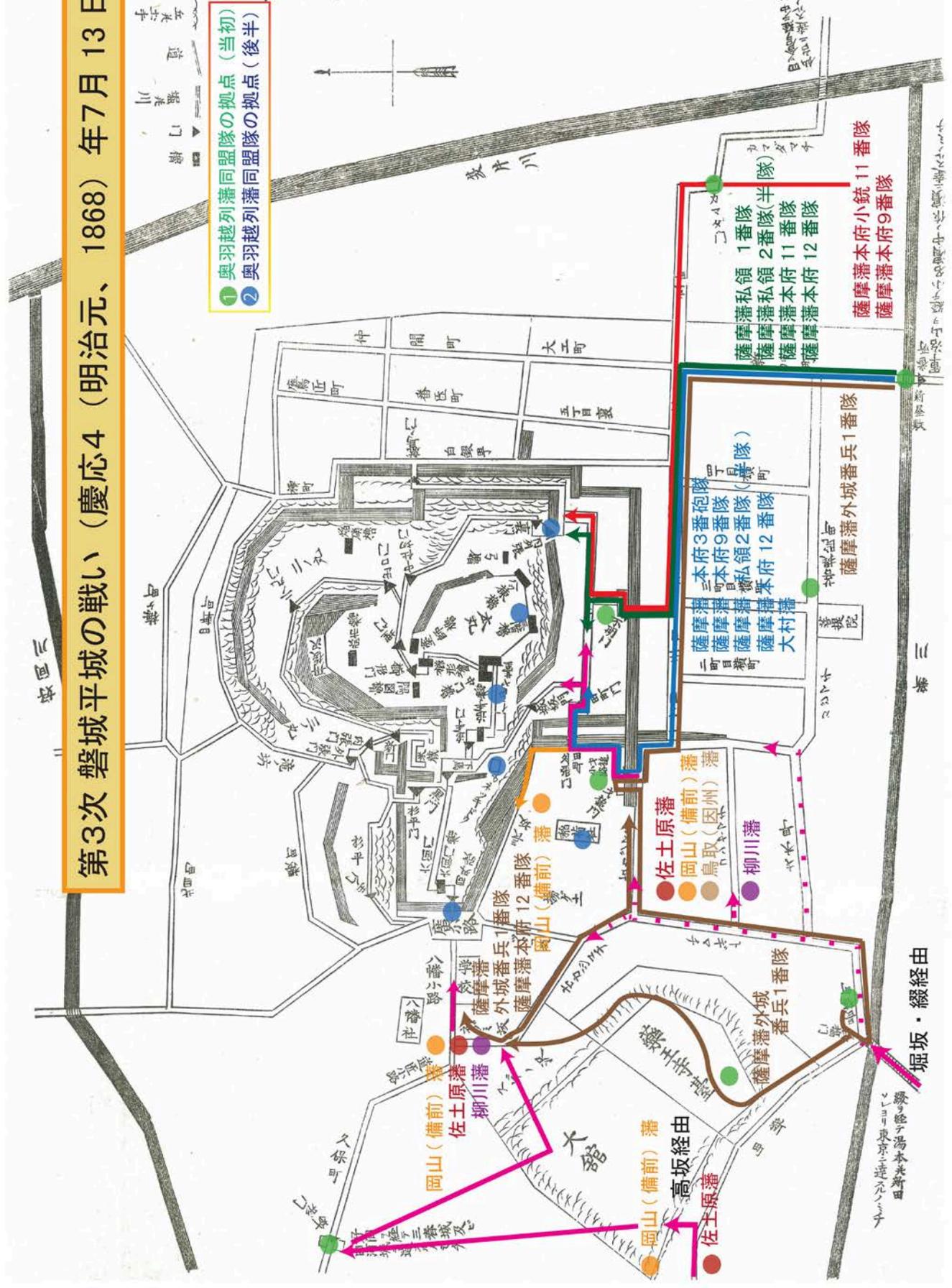
上坂と向かい合った将監は「この城を出て、相馬に行き、そこで、ともに戦い、再起を期しましょう」と上坂に語った。しかし、上坂は首を横に振り、先ほど、磐城平藩の主だった者たちに語ったように、「私は一人、城に残り、城を枕に討ち死にする」といった。これに対し、将監は「御同盟の事故ことゆえ、拙者儀せつしやぎも一寸も不退しりぞかず、共に城を枕に討死可致いたすべし」、相馬藩と磐城平藩は同盟の間柄、上坂殿が城を枕に討ち死にをするのであれば、私も御一緒をいたしますといった。

これには、さすがの上坂も「将監言葉の義、理に迫り」、ともに城を出ることを決断するにいった。

第3次 磐城平城の戦い (慶応4 (明治元、1868) 年7月13日)

磐城平城及上附近戊辰當年ノ地圖

- ① 奥羽越列藩同盟隊の拠点 (当初)
- ② 奥羽越列藩同盟隊の拠点 (後半)



堀坂・綴經由

戊辰戦争年表

西 暦	年 号	主 な 出 来 事	
1867	慶応 3	10月	大政奉還
		12月	王政復古の大号令
1868	慶応 4 (明治 元)	1月 3日	鳥羽・伏見の戦い
			戊辰戦争が始まる
		1月 8日	徳川慶喜ら海路で大阪から江戸へ
		1月 9日	明治天皇即位
		3月	五箇条の御誓文が出される
		4月 11日	江戸城無血開城
		6月 16日	新政府軍、平潟上陸
		6月 17日	九面の戦い
		6月 18日	笠間藩、神谷陣屋を追い出され、薬王寺に移る
		6月 26日	笠間藩の援軍が笠間を出発
		6月 28日	泉城落城
			新田坂の戦い
		6月 29日	二ツ橋の戦い
			湯長谷城落城
			堀坂の戦い・第一次磐城平の戦い
		7月 1日	第二次磐城平の戦い
		7月 3日	笠間藩、薬王寺を追い出され、八茎に移る
		7月 8日	笠間藩の援軍、八茎到着、合流
		7月 10日	七本松の戦い
		7月 13日	第三次磐城平の戦い
			磐城平城落城
8月 23日	鶴ヶ城籠城戦始まる		
	白虎隊士飯盛山で自刃		
9月 8日	明治に改元		
9月 22日	会津藩降伏		
9月 24日	磐城平藩、湯長谷藩、泉藩降伏		

>>> 関連資料 <<<

- ◆ 『安藤対馬守信睦公』 いわき歴史文化研究会 || 編
磐城平藩主安藤家入部二五〇年記念事業実行委員会 2006 (K/210.5-1/イ)
- ◆ 『維新再考』 福島民友新聞社編集局 || 編著 福島民友新聞社 2018 (K/210.6-0/ボ)
- ◆ 『いわき市史 第2巻 近世』 いわき市史編さん委員会 || 編 いわき市 1975 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『いわき市史 第9巻 近世資料』 いわき市史編さん委員会 || 編 いわき市 1972 (K/210.1-1/イ)
- ◆ 『磐城三藩の戊辰戦争』 改訂増補版 上妻又四郎 || 著 雄峰舎 2018 (K/210.6-1 /ア)
- ◆ 『磐城三藩明治戊辰戦争余聞』 斉藤笹舟 || 著 東海岸郷土史蹟研究会 1940 (K/-210.6-1-サ)
- ◆ 『磐城平藩戊辰實戦記 藩士十六人の覺書』 小野一雄 || 編著 平安会 2013 (K/210.6-1 /オ)
- ◆ 『いわきの戊辰戦争』 夏井芳徳 || 著 纂修堂 2018 (K/210.6-1 /ナ)
- ◆ 『磐城戊辰史』 本多忠緯 || 編 明治百年記念事業磐城推進委員会 1968 (K/210.6-1 /イ)
- ◆ 『奥州巡礼・佐土原飛脚』 水澤松次・青山幹雄 || 編 第二巧版 1994 (K/210.6-1 /ミ)
- ◆ 『寛斎日記』 斉藤省三 || 編 陸別町教育委員会 1982 (K/915.5 /カン)
- ◆ 『舊平藩戊辰殉難者追憶』 三村直次 || 編 安藤家 1967 (K/210.6-1 /キ)
- ◆ 『古文書が語る磐城の戊辰史』 いわき歴史文化研究会 || 編著 平安会 2018 (K/210.6-1/イ)
- ◆ 『薩藩出軍戦状 1』 日本史籍協会 1972 (K/210.6-0 /サ-1)
- ◆ 『関寛斎 奥羽出張病院日記 解説本』 関内幸介 || 解説 陸別町教育委員会 2016 (K/915.5 /セキ)
- ◆ 『内藤政憲家記』 内藤政憲 || 著 [1878] (K/288/ナ)
- ◆ 『復古記 第13冊』 東京大学史料編纂所 || 編 東京大学出版会 1975 (K/210.6-0 /フ)
- ◆ 『戊辰私記』 味岡礼質 || 編 平読書クラブ 1975 (K/210.6-1/ボ)
- ◆ 『戊辰戦争 150年』 福島県立博物館 || 編 福島県立博物館 2018 (K/210.6-0/フ)
- ◆ 『戊辰役戦史 上』 大山 柏 || 著 時事通信社 1988 (K/210.6-0/オ-1)
- ◆ 『松村病院史 第1巻』 松村病院史編集委員会 || 編 磐城済世会 2003 (K/498/マ-1)
- ★ 「明治150年」ポータルサイト(内閣官房「明治150年」関連施策推進室)
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/meiji150/portal/>
- ★ 「明治150年」関連施策(福島県)
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/11025b/tiikishinkou-131.html>



企画展「いわきの戊辰戦争 その2」―磐城平の戦い―

■会期 2018年11月7日(水)―2019年5月26日(日)

■会場 いわき総合図書館 5階 企画展示コーナー

平成30(2018)年11月7日 発行

■編集・発行 いわき市立いわき総合図書館